

事例報告

大学生女子ハンドボールチームにおけるゲーム様相の 変化に関する事例報告：2017年東北学生ハンドボールリーグ 春季リーグ戦と秋季リーグ戦を比較して

吉田 洋志, 桑原 康平

Hiroshi Yoshida, Kohei Kuwahara: Case report on the change of game aspects in university student handball : Comparison of the 2017 Tohoku spring league match and games: Bulletin of Sendai University, 49 (2) : 169-173, March, 2018.

Abstract: The purpose of this research is to compare cases of S University games, and thereby gain knowledge to be used for the improvement of competitive skills and guidance in future handball competitions. Analysis was conducted by entering the game record on an independent score paper to generate stats. The result of the analysis, in the numerical values of the attack success and miss rates, indicated a reversal of the results of previous research describing the necessary components for winning games.

Key words: Attack success rate, fast attack, shoot success rate, miss rate
キーワード: 攻撃成功率, 速攻, シュート成功率, ミス率

I . 緒言

ハンドボール競技は、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開するゴール型競技であり、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートを放ち、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲームである。相手より1点でも多く点数を獲得したチーム、すなわち攻撃の成功率が高いチームが勝利となるため、攻撃において様々な攻撃パターン、そのチームにあった攻撃戦術を取り入れて行うことが重要となる。ハンドボール競技の攻撃は、遅攻と速攻にわけられ、いずれにおいてもシュートを打つために有利な状況を作り出す動きや、数的優位状況を作り出す動きが必要である。

遅攻における基本的な考え方として、大西¹⁾は位置取り、きっかけ、展開、突破、シュートの5局面があり、その中でもディフェンスを崩す「きっかけ」とシュートにつなげる「突破」は攻撃活動の要であると述べている。それ以外にも、フィールドの端に位置し、角度の狭いエリアからシュートを打つサイドシュートや防御者の上や防御者間の間からシュートを打つディスタンスシュートがある。大西ほか²⁾は、ゲームにおける遅攻と速攻の割合をみると遅攻の割合が多いことが報告されている。遅攻は、成功率において速攻より劣るものの攻撃全体に占める割合は高く、遅攻の成功率をあげることが、試合の勝敗に大きく影響することは明らかであると大西¹⁾は述べている。

速攻の考え方として、八尾³⁾は相手プレー

ヤーが帰陣している中で、先行プレーヤーにバックプレーヤーが加わり、防御システムが十分に機能する前の時期を利用するため、早い走りと短く素早いパスのコンビネーション、コート中央を支配するように迅速に移動し攻撃を行う必要があると述べている。つまり、遅攻よりも走っている中でのパス、キャッチといった基本動作、空いているスペースを見つけ突破する判断力が特に求められる。八尾³⁾は、攻撃の成功率を高めるためには、数的優位状況を作り出すことの容易な速攻による攻撃力を高める必要があると述べている。また、大西¹⁾はゲームにおける攻撃成功率において、遅攻より速攻のほうが高いことを報告している。他にも、速攻によって6mのシュート数を増やすことは最終スコアに直接的な影響を及ぼすと山田⁴⁾が述べている。

本研究では、S大学の試合を用いて事例報告を行い、競技力向上のための知見として、また今後のハンドボール競技の指導における資料の一つとして活用されることを目的とした。

II. 研究方法

1. 分析対象チーム

著者自身がコーチを務める東北学生ハンドボール女子Aリーグに所属するS大学

2. 分析対象試合

2017年5月に行われた、第53回東北学生ハンドボール春季リーグ戦三試合（以下、春）と同年9月に行われた第59回東北学生ハンドボール秋季リーグ戦（以下、秋）とした。

各リーグ戦の結果を以下の表1, 2に示す。

3. 分析方法

春と秋の試合映像を基に独自に作成したスコア用紙に試合記録を記入し、スタッツを作成した。記入の作業は試合中に選手が手書きで行い、スタッツに関しては、大会が終わってから映像を用いてパソコンで作業を行った。

4. 分析項目

攻撃回数、攻撃成功率、得点数、シュート生起数、シュート成功率、ミス回数、ミス率、速攻の8項目とした。攻撃成功率、シュート成功率、ミス率に関して、以下の計算式を用いて算出した。

$$\text{攻撃成功率} = \text{得点数} \div \text{攻撃回数} \times 100 (\%)$$

$$\text{シュート成功率} = \text{得点数} \div \text{シュート生起数} \times 100 (\%)$$

$$\text{ミス率} = \text{ミス回数} \div \text{攻撃回数} \times 100 (\%)$$

III. 結果

1. 春のスタッツを表1に、秋のスタッツを表2に示した。

- 1) 攻撃回数において、春は161回、秋は192回で31回増加したことがわかる。
- 2) シュート生起数において、春は132回、秋は140回で8回増加したことがわかる。
- 3) 得点数において、春は55点、秋は79点で24点増加したことがわかる。
- 4) 攻撃成功率において、春は34.2%、秋は41.1%で6.9%上昇したことがわかる。
- 5) シュート成功率において、春は41.7%、秋は56.4%で14.7%上昇したことがわかる。
- 6) シュート達成率において、春は81.9%、秋は72.9%で9%減少していることがわかる。
- 7) 速攻の生起数及び成功率において、春は22本で63.6%、秋は54本で77.8%であり、生起数が32本増加し、成功率が14.2%上昇していることがわかる。
- 8) ミス回数及びミス率において、春は29回で18%、秋は52回で27.1%であり、ミス回数が23回増加し、ミス率が9.1%上昇した。

IV. 考察

春の反省として攻撃成功率とシュート成功率が低いことを挙げた。そこで秋に向けての課題として、確率の高いエリアからのシュート生起数の増加を挙げた。秋の課題を克服するために、

ハンドボールのゲーム様相に関する事例報告

表1 東北学生ハンドボール春季リーグ戦 スタッツ

年月		29年		5月			
大会名		平成29年度第52回東北学生ハンドボール春季リーグ戦					
仙台大学		28		- 27		相手チーム	
		27		- 27			
		55		54			

仙台大学	前半	後半	計	相手チーム	前半	後半	計
攻撃回数	82	79	161	攻撃回数			
得点	28	27	55	得点			
攻撃成功率	34%	34%	34%	攻撃成功率			
ミス数	14	20	34	ミス数			
ミス率	17%	25%	21%	ミス率			

仙台大学	ポスト	右サイド	右サイド	ディスタンス	速攻	カッイン	リバウンド	F・S合計	成功率	7m獲得	7m	7m成功率	ミス	速攻	退場	失格	シュート達成率	ミス率	個人攻撃成功率	
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
3	16	11	0	0	0	0	0	0	65%											
4	0	0	0	0	13	7	0	0	58%											
5	0	0	1	1	0	0	16	1	25%											
6	0	0	4	2	0	0	0	9	57%											
7	2	0	4	1	0	0	2	1	33%											
8	0	0	0	0	0	0	11	1	29%		1	1	100%							
9	0	0	0	0	0	0	9	3	38%		3	1	33%							
10	0	0	0	0	1	0	0	0	0%											
11	0	0	0	0	0	0	4	1	22%											
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
13	1	1	0	0	2	0	0	0	17%											
14	0	0	0	0	0	0	0	0	0%		1	1	100%							
15	0	0	0	0	1	0	2	0	20%											
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
17	9	0	0	0	0	0	0	0	0%											
18	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
20	0	0	3	2	0	0	0	3	67%											
計	19	12	12	6	17	7	45	7	63.2%	22	14	10	6	0	0	0	125	52	60.0%	
成功率	83.2%	50.0%	41.2%	15.6%	63.6%	60.0%	0.0%	41.6%												

表2 東北学生ハンドボール秋季リーグ戦 スタッツ

年月		29年		9月			
大会名		平成29年度第52回東北学生ハンドボール秋季リーグ戦					
仙台大学		43		- 22		相手チーム	
		36		- 29			
		79		51			

仙台大学	前半	後半	計	相手チーム	前半	後半	計
攻撃回数	94	98	192	攻撃回数			
得点	43	36	79	得点			
攻撃成功率	46%	37%	41%	攻撃成功率			
ミス数	19	33	52	ミス数			
ミス率	20%	34%	27%	ミス率			

仙台大学	ポスト	右サイド	右サイド	ディスタンス	速攻	カッイン	リバウンド	F・S合計	成功率	7m獲得	7m	7m成功率	ミス	速攻	退場	失格	シュート達成率	ミス率	個人攻撃成功率	
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
2	0	0	0	0	0	0	10	8	80%											
3	9	7	0	0	0	0	3	2	69%											
4	0	0	0	0	1	1	0	0	50%											
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
6	0	0	2	1	0	0	0	1	67%		1	1	100%							
7	0	0	4	3	0	0	0	15	80%											
8	0	0	0	0	0	0	8	3	56%		1	0	0%							
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
11	0	0	0	0	0	0	7	2	53%											
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
13	0	0	0	0	1	0	0	1	50%											
14	0	0	0	0	0	0	1	0	0%		0	0	0%							
15	0	0	0	0	0	2	3	1	35%											
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0%											
17	9	0	0	0	0	0	2	0	0%											
18	0	0	0	0	1	0	10	1	42%											
19	0	0	0	0	3	2	0	0	83%											
計	9	7	6	4	18	1	31	7	77.8%	22	13	10	6	0	0	0	138	78	50.0%	
成功率	77.8%	66.7%	33.3%	22.6%	77.8%	56.5%	0.0%	56.5%												

速攻でのシュート生起数を増やす戦術を取り入れた。山田⁴⁾が速攻は相手の防御が組織化する前に攻めるために、6mのシュートチャンスを作りやすい傾向にあると述べるように、遅攻に比べて確率の高いエリアからのシュートを打つことが出来るからである。春までは、速攻ではなく、遅攻での戦術練習に取り組んでいた。理由として、ミスで終わるのではなく、確実にシュートで終わらせるという目的があった。それは、杉森ほか⁵⁾が、速攻におけるミスは直後の相手の攻撃成功率を50%以上に高めてしまうことを報告している通り、シュートではなく、ミスで相手に所持権が移ってしまうと、速攻を与えてしまい、確率の高いエリアからのシュート生起数が増えてしまう恐れがあるためである。結果的に、シュートで終わることは出来て

いたが、得点に結びつかなかった。原因としては、確率の高いエリアからではなく、防御者の前から打つことが出来るディスタンスシュートで終わることが多かったことが挙げられる。ディスタンスシュートはゴールから遠いエリアから打つシュートのため、シュート成功率が各エリアの中で最も低いと言われている。そのため、シュート生起数は多かったが、シュート成功率が低かった。遅攻における必要な技術として、ランニングステップ、フェイントステップを駆使し、防御者の上、防御者間からのジャンプ、ステップ、ランニングシュートの技術、防御者間を1:1で突破するフェイントの技術といった、個人の技術が挙げられる。そのため、相手より個人の技術が劣っていると、確率の高いエリアからのシュートを打つことが出来ず、

結果的に確率の低いディスタンスシュートで終わることが多かった。

速攻では、パスキャッチといった基本技術、クロスプレーなどといった応用戦術を走っている中で行うため、遅攻よりもミスが起きてしまう。ミスが起きてしまうと、上記で述べた通り、相手の確率の高いエリアからのシュート生起数が増える恐れがある。しかし、遅攻に比べて個人の技術よりも、数的優位状況を作り、確率の高いエリアからシュートを打つといった、チーム戦術が必要となり、個人での突破が不可能であっても、確率の高いシュートで終わることが出来る可能性が高い。和田ら⁶⁾が、一般的に攻撃成功率は遅攻より速攻の方が高いと報告している。また、長岡ら⁷⁾世界のトップレベルのハンドボールのゲームにおいて、得点獲得の有効的な方法は速攻であると報告していることから、今回の秋に向けてミスを恐れるのではなく、速攻における数的優位状況を作り出し、そのエリアからシュートで終わらせるために、秋までの約4ヶ月間の練習の中で、2対1, 3対2, 4対3, 5対4, 6対5といった、攻撃側が一人多い状況、つまり数的優位状況を設定して速攻練習を繰り返し行った。その結果、秋は攻撃回数が31回増加しているが、シュート生起数は8本増えただけであった。また、ミス回数が23回増加し、ミス率も27.1%と春に比べて9.1%増加したが、得点数をみると24点増加していることから、課題として挙げていた、攻撃全体でのシュート生起数の増加は達成することが出来なかったが、シュート成功率は春に比べて13.7%増加し、56.4%と高い数字を記録した。

攻撃成功率は、春に比べると7.9%増加しているが、41.1%と決して高い成功率ではない。

各シュートにおける速攻の生起数及び成功率をみると、春に比べて生起数は32本増加し、成功率は14.2%上昇し77.8%になったことから、課題として挙げていた、確率の高いエリアからのシュート生起数を増加することが出来、さらに成功率も上昇することができた。

しかし、先行研究において以下のような内容が述べられている。

まず會田ほか⁸⁾は、女子ハンドボール競技においては、45%以上の攻撃成功率を目標にすることが望ましいと述べている。次に八尾⁹⁾は、ボールの所有権を失い、大事な場面においてはミスプレーをしたチームが敗者となることが考えられると述べている。また、1試合において得点は30点以上の得点能力にミスプレー率を20%以下に抑える攻撃戦術の必要性が明らかになったことも述べている。

上記の先行研究によると、試合において勝利を収めるためには、攻撃成功率は45%以上であること、1試合において得点を30点以上の得点能力に、ミスプレー率を20%以下に抑えることが重要であり、また大事な場面においてミスプレーをしたチーム、すなわちミス回数が多いチームが敗者になる可能性が高いことを述べている。しかし、今回の結果はいずれの先行研究も覆していることになる。その理由については、今回の内容では解明することが出来なかったため、今後の研究において原因究明していく。

V. 結論

本研究では、S大学の試合を用いて事例報告を行い、競技力向上のための知見として、また今後のハンドボール競技の指導における資料の一つとして活用されることを目的とした。分析した結果、以下の結論が得られた。

1. 攻撃回数が31回増加した。また、ミス回数、ミス率ともに増加し、課題としていた攻撃全体でのシュート生起数の増加は達成することが出来なかった。
2. 速攻の生起数および成功率が増加したことから、課題としていた確率の高いエリアからのシュート生起数を増加することが出来、さらに成功率も上昇することができた。
3. 試合において勝利を収めるために必要な内容を述べている過去の先行研究を覆す

結果となった。

文献

- 1) 大西武三 (1998) ハンドボールにおける世界のトップレベルチームの戦術について
- 2) 大西武三・水上一・河村レイ子 (1974) ハンドボールの戦術に関する一考察—世界のトップレベルのチームに関して 筑波大学体育科学系運動学類運動学研究第1巻, pp63-73.
- 3) 八尾泰寛 (2013) ハンドボール競技のゲーム分析—速攻における局面に着目して—
- 4) 山田永子 (2011) わが国の女子ハンドボール競技におけるシュートプレーの問題点とその改善に関する研究—ヨーロッパ強豪国との比較に基づいて—
- 5) 杉森弘幸・大西武三・水上一 (1991) ハンドボールのミスプレーに関する一考察 筑波大学運動学研究第7巻, pp93-pp96.
- 6) 和田 拓・藤本元・山田永子・會田宏 (2013) ハンドボール日本代表男子チームにおける攻撃の現状と課題：同一監督が指揮した2008年から2012年までの公式試合の分析から ハンドボールリサーチ, 2: 9-20.
- 7) 長岡雅美・土井秀和 (1993) ハンドボールにおけるゲーム分析—第10回女子世界選手権大会を事例として—
- 8) 會田宏・檜塚正一・土合久男 (1995) スコアーによるゲーム分析からみた女子ハンドボール競技における攻撃の特徴 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 43: 49-54.
- 9) 八尾泰寛 (2009) ハンドボールにおける攻撃のミスプレーについて

(2017年11月30日受付)
(2018年 1月30日受理)

